

Dental Anti-Aging

Dental Anti-Aging

華齡 *Aging Science*

日本アンチエイジング歯科学会誌
Official Journal of Japan Society for Dental Anti-Aging

Vol. **2**
2009



日本アンチエイジング歯科学会
Japan Society for Dental Anti-Aging
<http://www.jd-aa.net/>

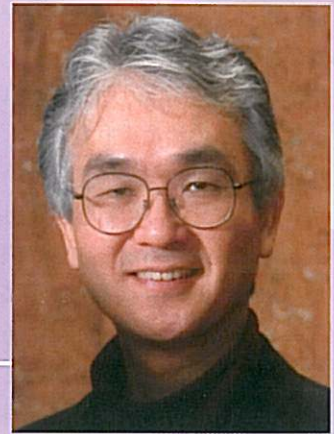
宝石・ジュエリー文化のルネサンス

有川 一三

(アルビオンアート株式会社代表取締役)

中原 悦夫

(日本アンチエイジング歯科学会編集委員長) (本誌)



(有川一三氏)

本誌 本日、お話をおうかがいする有川一三さんは、歴史的ジュエリーの世界的なコレクションで知られるアルビオンアートの代表であり、東京芸術大学非常勤講師も務められ、また、フランス政府から芸術文化勲章シュヴァリエの叙勲を受けられるなど、ジュエリーをはじめとする芸術文化に貢献をされています。本質において、宝石・ジュエリーと歯科医療は密接な関係にありました。それは歯科医療そのものが、美や工芸というものと不即不離の関係にあるからだと考えられます。ジュエリーの美を極められた有川さんのお話は、歯科医療に携わる私たちにも多くの示唆をいただけるものと思います。

有川 ジュエリーは長い間見過ごされてきた、人間の歴史に深くかかわる貴重な芸術の一分野です。私がジュエリーを何かに導かれるように集め始めて20数年がたちますが、初めの頃、ジュエリーは良くて“女性の装飾品にすぎないもの”、悪くいえば“単なる贅沢品にすぎない大して価値のないもの”という考え方が一般的でした。今でもこのように考えている人も多くいらっしゃるかもしれませんが、しかしながら、数多くの強烈な美的インパクトを持つジュエリーと出会い、また折にふれジュエリーの歴史をひもといていくうちに、ジュエリーが人間にとって重要な役割を果たしてきたことが私にも理解できるようになってきました。やっと最近になって、ジュエリーをアートとして捉える流れが世界的に少しずつ生まれてきました。おそ

らく、カルティエが1989年からスタートした「カルティエ コレクション展」が、本格的なものとして近年で最初にジュエリーを真正面からとらえた展覧会ででしょう。パリのプティパレ美術館、東京都庭園美術館、ニューヨークのメトロポリタン美術館など、世界の名だたる美術館や博物館で開催されたものです。それ以来少しずつジュエリーの展覧会が開催されるようになり、今では世界でも日本でも多くのジュエリーの展覧会が開催され、私どものところへも世界中から出品依頼が絶えません。とはいえ、まだ20年ほどの歴史しかなく、それ以前には、ジュエリーをテーマにした美術展は「ほとんどなかった」と言い切ってしまうくらいです。

本誌 たとえば、「エジプト展」といったテーマで、古代エジプト時代の数々の遺品の中で、王が身に着けていた装飾品のような形で、美術品の一つとしてジュエリーが出品されるケースは普通にありますよね。

有川 ええ、でも、ジュエリーそのものをメインテーマとした展覧会というのは、ありそうでなかったんです。これは最近になってからの傾向です。しかしながら、時代を遡って歴史を見てみますと、現在のジュエリーに対する認識のほうが異常だということがわかります。古代から近代まで、ジュエリーは人類にとって、美そのものであり、天国の象徴であり、神と人を結ぶ聖なるものでもあったのです。今のよう、手軽に手に入るようなものではありませんでした。なぜそれが今のように軽薄なものになってしまったのか、そして、ジュエリーの本質を再確認することにどんな意味があるのか、これから少しずつお話ししていきたいと思います。

本誌 よろしくお願ひします。

「絵画」以前の美としての「宝石」

有川 芸術にランクを付けるのはそもそもナンセンスですが、あえて、人類が生んだ美の中で頂点のものを選ぶと

Kazumi Arikawa

- ・アルビオンアート代表取締役、アルビオンアート・ジュエリー・インスティテュート主宰、東京芸術大学非常勤講師、歴史的なジュエリー収集家として世界的に知られる。
- ・昭和27年3月北九州市生まれ。昭和52年3月早稲田大学政経学部卒。昭和56年4月宝石の有川入社。西ドイツのフォルツハイム装身具美術館館長のフリック・ファルク博士の指導を受ける。昭和60年10月アルビオンアートジャパン株式会社設立。代表取締役就任。平成8年英国の宝飾史学家ダイアナ・スカリスブリック女史に師事。平成15年4月アルビオンアート・ジュエリー・インスティテュート(AAJI)設立。主宰。平成17年4月東京芸術大学非常勤講師就任。平成19年3月フランス共和国政府より芸術文化勲章シュヴァリエ叙勲。平成21年4月フランス大使館において授与式が行われた。

したら、現時点では「絵画」を挙げる人が多いのではないかと思います。実際、美術史の教科書では、人類における芸術の歴史は、アルタミラ洞窟（スペイン）、ラスコー洞窟（フランス）の壁画から始まります。旧石器時代と呼ばれ、人類が文明に目覚める以前の未開な時代とされていたこのころ、動物や人間、自然などが、力強い筆致で見事に描かれています。それは、儀礼や情報伝達用に記号化された絵文字の類とは明らかに異なりました。まして単なる落書きでもない、まぎれもない芸術作品としての圧倒的な存在感を示すこの壁画群を発見した当初、わが人類の祖先が、高い芸術性をすでに備えていた事実を見せつけてくれました。これがだいたい数万年前のものです。

本誌 芸術の歴史は絵画から始まっているということですね。

有川 そう、あくまで教科書の上ではそういうことになっています。ところが、インドのシンギタラトという遺跡の中に、その地方では採れないはずの水晶六個が、ちょっとした収集品のような形で出土しています（『人類の一番美しい物語』ちくま書房）。これがだいたい16万年から20万年前の遺跡とされていますから、そのころにはすでに、人類は宝石の美に感動し、何か特別なものとして受け止め、それを愛でることの喜びを知っていたのかもしれない。

本誌 絵画を描く前に、宝石を美として認識する文化がすでに人類にあったということですね。ラスコー、アルタミラよりさらに15万年以上も前ということになります。

有川 もちろん、発見された遺跡をベースにした、あくまで想像ではありますが、おそらくそう言っているのではないかと思います。たとえば、宝石も絵画も知らないころの人類だって、夕日や満月を見れば何かを感じたはずで、野生動物の雄々しさに感動したかもしれないし、異性を見て心惹かれるのも性欲そのものだけではなかったでしょう。そういった、美、あるいは調和といったものに心を動かされる感性がすでに人類にはあったと考えるのが自然です。そのときに、一瞬の風景の美しさは手元に置いておけないけれども、宝石は自然からもたらされた美の中でも手にできる例外的なものです。自らの手で一瞬の自然の造形を切り取って絵を描くことを知り、なおかつそれがある種の表現だと気付く前に、たまたま発見したきれいな石に強いインパクトを受け、そこに美を感じ、大切に並べたりしていたわけです。ガラスもプラスチックもない時代に、美しい色をした、しかもふつうの石でこすっても傷つきにくい宝石に対して原始人たちが受けたインパクトは、今の私たちの想像を超えるものでしょう。イスラエルでは10万年前の地層から貝殻で作られたネックレスが出土しています。貝殻や動物の骨などは、粗末な道具でも簡単に加工できますから、原始人たちが身を飾るという創造性を発揮するには良いものであったのでしょう。まさに人類

は洞窟で絵を描くよりはるか昔から宝石を集め、身をジュエリーで飾ったのです。

本誌 今まで私たちが持っていた概念にはない視点です。ハッとさせられるお話ですね。

有川 先史時代のことは想像を飛躍させるしかない部分はありますが、人類最初の文明が栄えたと言われるメソポタミアやエジプトにおいては、建築、絵画、音楽、舞踏、その他、すでにたくさんの芸術が生まれていたはずで、ほとんどのものが当時の姿としては失われてしまっていますので、簡単に結論を出すことは公平さを欠くのではと恐れますが、それでもあえて申しますと、当時の王や神官たちが政者にとって、宝石・ジュエリーは至高の芸術であり財宝であったのだと思います。メトロポリタン美術館（アメリカ）に所蔵されている、エジプト時代のペクトラル（胸飾）などは、現在の金工技術をもってしても太刀打ちできないほどの完成度の高い造形性と美しさを持っています。その当時の王はけっして“お気楽なもの”ではなかったでしょう。どの国の王であれ、他国との戦で負ければ民衆はともかく王は間違いなく殺される運命にあったわけですし、いつ身内や部下から毒殺されるかもわからない不安の中で王国を正しく運営してゆく重圧は、計り知れないものがあつたことでしょう。王自身、わが身が生身であり、弱きものであることを知っていたのかもしれない。その王が、宝石でできたジュエリーを身に付けて神に祈る行為は神の魂をわが身に呼び込み、わが身に潜む神性を顕現しようとするものであつたに違いありません。ジュエリーは神具そのものでもあつたんです。

本誌 それがいつのころからか、ジュエリーは贅沢な装飾品にすぎないものとなり、代わって絵画や彫刻が芸術の頂点に立つようになりました。

有川 有史時代からだけで見ても、メソポタミア文明やエジプト文明が栄えた5,000年前からずっと19世紀初頭までは、芸術・財宝の王様はジュエリーでした。原始時代において、自然石のままの宝石をただ並べていたところから出発し、カットや装飾など加工の技術が開発され、宝飾文化は徐々に発展してゆきます。インタリオ（宝石などに模様を彫り込む技法＝沈み彫り）はメソポタミア時代に粘土版に楔形文字で契約書が書かれ、それを神が証明するものとしてシリンダーシール（円筒形の宝石に沈み彫りされているもの）で押印を入れることが行われ、またカメオ（図1、周りを彫り込むことで模様部分を浮きあがらせる手法＝浮き彫り）は、アレキサンダー大王の時代に自ら帝国の地方統治を委ねる王や将軍たちに与えたことから、カメオの隆盛が始まり、ヘレニズム、ローマ時代はその最初の全盛期です。18世紀に書かれた『マールボロー・ジェムズ』というマールボロー公爵によるコレクション・カタログの中に、ジュリアス・シーザー（ユリウス・カエサル）



図1 洗足のカメオ (カメオ: 14世紀後半, フレーム: 1700年頃)
(アルビオンアート・コレクション)

が宮殿で神事をしている様子が描かれています。その絵の中で、シーザーはインタリオとカメオを神にささげているのです。この行為の持つ意味は何か。このころギリシャ・ローマの神々は、単なる神話ではなく信仰の対象であったわけですが、その神々がインタリオ、カメオには彫り込んであります。すなわち、神々の魂をその神々を彫ったインタリオ・カメオに招魂し、それを身に纏うことで、神々の命をわが命に重ねようとしたのではないかと思います。

本誌 ジュエリーは極めて神聖なものであり、そこには神秘の力が宿っていて、身に着けたものは神に近づき、邪を祓う力があつたと考えられていますね。

有川 中世において宝飾品は、修道院で修道僧たちが作っていました。たとえば、中世の金細工師エリギウスは、フランスの有名なサン・ドニ大聖堂の建設を指揮するなど高い能力を持った職人であり、同時に司祭でもありました。後に列聖され聖エリギウスとして鍛冶組合の守護神に奉じられています。ジュエリーと宗教は極めて密接で、不可分な関係にあったのです。高位の聖職者はサファイアのリングを着用することが勅令で定められていました。サファイアは、キリスト教においては聖母マリアの象徴であり、天国の象徴です。天国と民衆を結ぶ役割が聖職者の役割ですから、その力を強めるため、あるいは、その役目を天から認められた者の象徴としてサファイアを身に着けたのでしょう。また異端裁判のときの審問官は、身を守るためにサファイアのリングを着けて裁判に臨みました。

本誌 ジュエリーは、聖なるものであったということですね。それでは、その当時のジュエリーの価値というものはどれほどのものであったのでしょうか。

有川 ジュエリーの本質的意義が、単なる宝飾品ではなくより精神的なものであったわけですから、それゆえに、他のどの芸術に比べても、桁違いに高い評価で扱われました。どれほど高価なものであったのか、一つの証左があります。大英博物館に「ノアの方舟」と名付けられたカメオがあります。直径5.3 cmと、それほど大きなものではありませんが、中には見事な細工で、ノアが方舟につがいの動物を乗せて旅を終えた様子が描かれています。これは、ルネサンス時代の最大の文化的パトロンであったメディチ家（フィレンツェの門閥貴族）の全盛期を築き、イル・マニフィコ（豪華王）と称されたロレンツォ・デ・メディチの所蔵物でした。彼が亡くなったときの財産目録に興味深い記述があります。ご存じのとおり、メディチ家は、ポッティチェリ、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロら錚々たる芸術家のパトロンだったことで知られます。その財産目録の中には当然、絵画の全コレクションもあるわけです。うち、最も高価な絵画は、フラ・アンジェリコの作品で、金貨105枚という評価になっていました。しかし、これが資産リストの筆頭ではなかったのです。では、最も高価な資産は何だったのかと言えば、このカメオでした。「ノアの方舟」には、金貨2,000枚の評価が付けられていたのです。最も高価な絵のなんと20倍ということになります。

本誌 非常に高価だったんですね。

有川 当時は、油絵そのものがまだ新しいアートだったという事情もあります。ロレンツォが活躍したのは1400年代の後半ですが、フランドルのファン・アイクが油絵を完成したのがその約100年前。1400年代になって、ダ・ヴィンチが「絵画こそ芸術の中で至高のものである」と宣言し、モナ・リザを描いたころから、絵画が芸術として地歩を築くようになるわけです。当時は、ダ・ヴィンチが修業をしたヴェロッキオの工房などでも、絵画だけではなく、彫刻も手掛ければ、家具も造るし、食器も作る。建築や機械道具、武器の設計までしていました。要するに、絵画はまだ工芸品の範疇にあり、独立した芸術として洗練されつつある段階だったんです。その時点で、インタリオ・カメオは数千年の歴史のあるクラシックアートとして確立されたものでした。その当時、国家が戦争をするとき、手もちのジュエリーを担保に入れてお金を借り、戦費を調達していたという記録が数多く残っています。それほど価値のある国家資産であったのです。国の金庫を預かる大蔵省は、これは英語の「the Treasury」からきています。「Treasure = 財宝」を管理するのが大蔵省の大きな役目であり、その中心は宝飾品でした。宝石・財宝を取られてしまえば、国のアイデンティティも失われる、そういう極めて大切な、かけがえのない存在だったのです。東洋でも漢字の「国」

は玉（ぎよく・ヒスイ）をかこむという意味ですし、「宝」は家の中に玉があるという意味ですね。

本誌 今はジュエリーと絵画の位置関係は逆転してしまっていますよね。

有川 いえ、完全に逆転してしまっているわけでは実はないんです。ここは重要なポイントで、正確には、ちょっと価値の混乱が起こっているんだと思います。どういうことかという、価格のうえでは絵画が今では圧倒的ですが、扱いで言うと、今でもジュエリーは他の芸術作品とは別物として扱われている側面もあるのです。英国のロンドン塔やクレムリンの武器庫、ミュンヘンのレジデンツ（居館）のジュエリー保管展示室はすべて巨大金庫の中で守られています。つい最近も、サンクトペテルブルクのエルミタージュ美術館（ロシア）に行ってきたんですけども、最も印象に残ったのはレオナルド・ダ・ヴィンチの絵画でした。というのは、その聖母子像のかわいらしさと深みのある美しさもさることながら、本当に目の前の、それこそ、数cmまで近づいて絵を見ることができるんです。もちろん、ガラスでカバーしてありますから実際に触ることはできませんが、細かい筆の運びなどまで生々しく見ることで、「あのダ・ヴィンチがこの部分をこのように筆を走らせたのか」と思うと、やはりゾクッとするほどの感動を覚えました。他にたくさんの貴重な絵画が展示してありましたが、すべて同様です。特別な人、特別な場所だけではなく、普通に訪れて、普通に入場券を買えば、誰でもそうやって見ることができます。ところが、ジュエリーだけは特別扱いなんです。入口が一つしかない独立した金庫のような特別室にジュエリーが集められていて、そこには追加料金を払わないと入れない。しかも、時間が指定されて、自由行動も許されない。観覧希望者は入口に集められ、ガイドに導かれて約一時間、ぐるりと一回りしたらその部屋を出されてしまう。ガイドは説明役と同時にわれわれの監視役でもあるのです。そのとき私は、ヨーロッパの人にとって、絵画はあくまでも美術品なのに対してジュエリーは財宝なのだ、改めて確認できた気がしました。つまり、絵画というのは美術品ですから、どれだけ高価だろうと希少だろうと、“鑑賞”がテーマです。でも、ジュエリーは鑑賞よりも、保持することが重要なんですね。ひょっとすると、そこに展示してあったジュエリー全部の価格より、ダ・ヴィンチの絵一枚のほうが高価かもしれません。でも、そういう問題ではないんです。

本誌 需要と供給の関係で価格が変動しているだけで、絶対的な価値、そのものの存在価値が変わってしまっているわけではないですよ。

有川 ええ、絵画は、ダ・ヴィンチが生きていた時代と今ではその価値は全く変わってしまっていますし、いま現在栄華を誇る作家の作品も、芸術品に対する世間の見方

や流行り廃りで価値が大きく変わってしまう。芸術品にはもともとそういう宿命があります。何の変哲もない古い空きビン、子どもが遊ぶブリキのおモチャをコラーージュしたラウンシェンバークの作品でも、今をときめく立派な芸術品ですし、その逆に、全く無価値になってしまうものもあるでしょう。もちろん、ジュエリーにもそういう傾向がないわけではなく、今まさに、芸術品としては不当とも思える低い評価をされているわけですが、少なくとも、時代によって価値が消失してしまうことはほとんどないと言えるでしょう。だからこそ財宝なんです。

本誌 なるほど、すると、ジュエリーの持つ本質的な価値の意味として、美術品ということと、もう一つ普遍的資産性が重要なポイントとしてありそうですね。

有川 おっしゃるとおりで、ジュエリーは劣化しませんので、制作した当時のインパクトがいつまでも残る。形あるものはすべて壊れるもので、絵はどんなに丁寧に保管しても、劣化を止められない。陶器やガラスにしても、形は比較的に残るけれど、風合いは失われていきます。でも、ジュエリーはほとんどそのまま残る。物質として非常に安定しているからです。そして、ただ硬いというだけではなく、希少であることもコレクションとしての価値を高めます。だけど、それだけではジュエリーがこれだけ大切にされてきた意味を理解するのに不十分です。やはり、最大のポイントはジュエリーの持つ本質的な美と感動の世界にあると思うんです。

本誌 ということ？

ジュエリーの本質的な美とは

有川 ジュエリーの持つ輝きに極めて大きな意味があります。光というのは、人類にとって代えがたい宝物であり、これがなければ生命は維持できません。生命体にとって光は、絶対的なマスト(必要条件)なんです。植物が陽の光に向かって伸びていくように、生命は本能的に光を欲するんです。それは天からもたらされるものであり、まさに、光は神の属性なのです。すなわち、宝石の持つ輝きは、天から授けられた地上の光なんです。また、ローズカットのダイヤモンド・クロス（図2）はドイツ30年戦争において旧教徒と新教徒が血で血を洗う殺し合いを続けて、ドイツの人口が2/3とも半分ともなった時代のものです。まさに命をかけた信仰を受け止めるだけの美の存在感があります。

本誌 理屈ではなく、光に魅せられ、存在そのものに魅せられる本能があるわけですよ。

有川 「美」とは、極めて深遠なテーマです。普通、「美」は「おまけ」くらいにしか考えられていません。たとえば、必要性、利便性があって、美は二の次で、生きていくのに必ずしも重要なものではないと認識されがちです。ところが、花がなぜ美しいのでしょうか。それは昆虫を呼ぶため

です。昆虫の気を惹かないと、受粉できない、したがって繁殖できないから、より美しい種が残るんです。雄の孔雀がなぜ美しく羽を広げるのか、雌の気を惹くためですね。そうして、より美しい種が残っていく。だから自然は美しいんです。その自然の美しさが失われるとどうなるでしょうか。この地球上の空気が汚れ、水が汚れて、緑が枯れると美しくないですね。美しくなくなるということは、生命の営みの否定であり、当然、人類の死滅も避けられません。すなわち、美とは生命体にとって、生存をかけたコンセプトそのものなんです。

本誌 美とは、生命そのもの。なるほど、われわれ菌科の分野でも、まさにそのことを強く訴えたいところなんです。審美と一言で言ってしまうと、機能性や合理性とは別に美を追求する分野だと思いがちですが、本当の美しさは機能性や合理性を突き詰めたところにある。見た目だけ重視した、張りぼての美では、本当の美しさは感じられない。ちょっと見た目はいいけれど、なんとなく満足できないし、それに、機能性が低下してしまうなどして、結果、何度もやり直すことになりやすい。美は一つの生命の機能を追求し、かつ、他の生命体を含めた宇宙の中での調和を図るために必要不可欠な条件として完成されたものだと考えているんです。つまり、自然にできあがった理想的な形状や動きといったものには必ず理由があり、それが完成されたところに本当の美があると。

有川 そうでしょうね。目に見える形状の裏には、成立過程があって、その形ができた理由がある。他の物質や現

象とのバランスや調和があって、初めてその形状として成り立つものですからね。その本質にあるものを無視して、形状だけつくりだすのはやはり不自然になるのでしょう。ジュエリーでも、見えないところに手を尽くしてないものは、やはり全体として表情がよくありません。ですから、いいジュエリーほど見えないところの細工が完璧なんです。たとえば、先ほどの、美しいものが種を残しやすいという話でも、鳥や動物が「美」を本当に感じとっているのではないかと思います。たとえば、こういう話があるんです。雄鳥二羽と雌一羽を用意し、一方の雄にはプラスチックの輪を片足だけにはめ、もう一方の雄には両足に輪をはめておく。その状態で雌を放し、どちらの雄を選ぶか見ていると、何度実験しても両足にプラスチックを付けた雄を選ぶのだそうです。調和がとれていない、アンバランスさが、雌鳥に何か不安感をもたらしているのでしょうか。

本誌 非常に示唆的な話ですね。

有川 ただ、そうした美的意識が、人間の場合、やや本能の欲するところからずれてしまい、そこに、先ほどから指摘している価値の混乱が今起こっている気がするんです。西洋美術はギリシャ・ローマ時代に一つの頂点を極めます。ルネサンスはそのギリシャ・ローマに撞れるわけですが、このときにはまだジュエリーがパーソナルな芸術の頂点にあり、また、社会文化的にもジュエリーと密接なつながりを持つ宗教の時代であったと言えるでしょう。それがルネサンス時代に生まれたヒューマンイズムの台頭という流れの中で、芸術のあり方が大きく変化していきます。神中心の価値観から、人間中心の価値観に移っていく。いわば、神の世から人間の世への転換です。「人は神によって生み出されたしもべ」ではなく、「進化の頂点に立つ偉大な人類」になった。それが後に資本主義を生み、産業革命を生み、科学文明の極度な発達を生んだ、とは言えないでしょうか。そして今地球は、もはや人類の存続が危ぶまれるほどにまで荒廃しています。一説には、後200年で地球上の酸素がゼロになるとも言われているほどで、その真偽のほどはわかりませんが、少なくともこのままいけば、遠くない未来に人類の滅亡を迎えるのは必然でしょう。

本誌 芸術の歴史から見た文化の変遷と、人類の勃興を見る視点は斬新ですね。

有川 そこはこじつけではなく、やはり、通じるものがあると思うんです。神中心の価値観を持っていたころ、「太陽の神、月の神、土地の神、風の神、水の神に私たちは生かされているんだ。だから大切にしないといけない」と考えて、その命の象徴として、自然からもたらされた宝石からジュエリーを創造し、自らの生命を強める宝として大切にしていた。

本誌 なるほど、おっしゃるとおりかもしれません。でも人間はもう科学の恩恵を知ってしまった。もう神代の時代

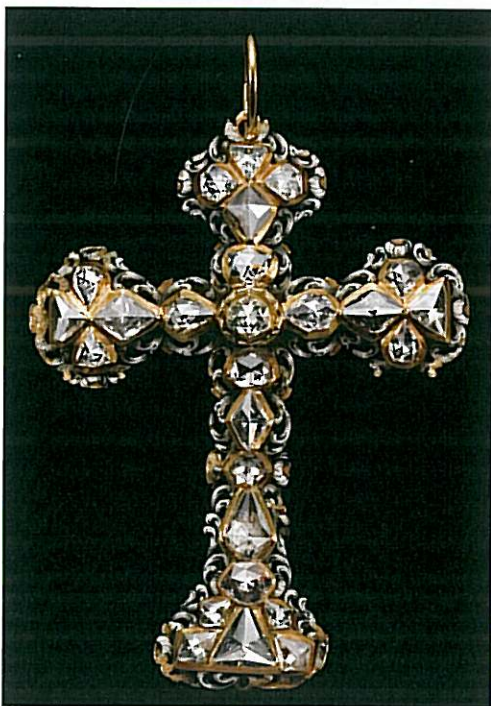


図2 ローズカット・ダイヤモンド・クロス (1660年頃)
(個人蔵 (協力: アルピオンアート))

には立ち戻れません。

有川 人類は今、自分たちの育んできた文明が、間違っただ道に入ってしまったことに気づいています。人間中心主義という価値観ではもはや人類の生存を保証できないことを知ってしまった。そして今人間中心主義という価値観から“あるべき姿の地球があって、そこに人間も共生している”という地球中心の価値観にシフトしてきているのではないかと。そしてこの転換期において、“地球が生み出した純粋で普遍性のある自然の美”としての宝石と人間の魂の造形であるジュエリーが、もう一度人間の生命を荘厳するものとしての役割を21世紀に復権する可能性と必要性があるのではないかと思えるのです。

なぜ人は宝石に魅かれるのか

本誌 なぜ人はジュエリーを持つようになったのか、単にきれいで希少で、物欲を刺激するからではなく、それを持つことで精神をサポートしてくれる役割があったと。

有川 そうです。ここで、大事な話をしたいと思います。私自身、宝石とは何か、ジュエリーを扱うことの意義は何かといったことを考え、その答えを探するためにいろいろ手を尽くし、結果、非常に重要な示唆をいただいた方が二人いらっしゃいます。一人はダライ・ラマ法王です。私が「宝石とはなんですか？」とお尋ねすると、法王は黙って心臓を指し示されました。大乘仏教の経典では、極楽浄土は宝石できていてと書かれています。華嚴経の第一節には、仏が悟りを開いたとき、花と宝で荘厳されたとも書いてある。物欲を否定した仏教で、なぜ宝石を重視するのかを考えると、宝石は美の象徴であり、そしてピュアなものであるということの一つのたとえではないかと思うのです。

もう一つの重要な示唆をいただいたのは、今度は、宗教の対極にあるような科学者。電子工学の権威である西澤潤一先生（元東北大学・学長、首都大学東京・学長）です。科学的な見地からの見識をうかがいたくて、私は先生に「宝石とは何ですか？」とお尋ねしました。すると、先生はこうおっしゃいました。「すべての物質は不安定で、エネルギーが高い状態にあり、性状として安定を模索する方向性を持っている。最も安定した状態が結晶であり、その究極が宝石である」と。物質にとっての究極の理想形は、整然と原子が並んだ状態であり、つまりそれが宝石だということなんです。

本誌 物質というのは基本的に、宝石になろうとする力が働いていると。

有川 そうですね。そのとき私も西澤先生に、「それは、すべての物質が宝石を目指し、宝石になりたいという方向性を持っているということでしょうか？」とうかがうと、「そう思います」ということでした。重ねて、「すると、わ

れわれ人間の肉体も、宝石になりたいという願望を、潜在的に持っていると考えていいのでしょうか？」とうかがうと、これも「そう思います」とおっしゃっていました。であれば、たとえば、炭素にしても、いつかは必ずダイヤモンドになるわけではなく、普通は不安定な状態ですが何かのきっかけで結晶化が始まると、どんどん純度が上がり、そして、エネルギーが限りなくゼロ化していく。するとそれは、人間の精神が澄んできて安定に向かい、乱れた心がゼロ化していくプロセスにも似ています。原始のころから人間は本能的にそのような宝石の働きを感じていたのかもしれませんが。だから人は宝石やジュエリーを持ちたがる。心が澄んでいくから、本来求めているゼロ化した境地に、それは言ってしまうと……。

本誌 それはもはや精神の領域ですね。

有川 そうですね。人間というのは、本来はその対極にあるものです。動物は究極の複合体であり、あらゆる物質が集積している状態であり、その肉体はどんどん劣化していく。さらに人間は、もっとやっかいな精神まで抱えています。精神は安定しないで常に煩悩に揺れ動くものです。それが人間の不安定さをより増幅しています。複雑で、安定性とは程遠い、奇跡的なバランスでなんとか存在を保っているけれど、いつ鐘（たが）が外れるかわからない危うさと常に同居しているのが人間です。だから、人は、ピュアな結晶である宝石に魅かれる。ジュエリーをいつも身近に置き、わが生命をサポートし、少しでも精神を清めようとした。それが、ジュエリーの本質ではないかと思うんです。

本誌 私たちは、肉体を維持するために食べ物を摂ります。食べ物は身体の栄養です。では、美を求めるのは何かと言えば、精神の栄養なのかもしれませんね。肉体的エネルギーは食べ物で満たせるけれど、それでは精神的エネルギーは満たされない。人間は、他の動物と比べられないほど、精神的なエネルギーを必要とするし、それが不安定でもある。その壊れやすい精神をサポートするものとして、ジュエリーを必要としていたのかもしれませんがね。

有川 重要なものの一つであったことは確かでしょうね。美は宝石だけではありませんから。自然そのものの美しさもあるし、建築、彫刻、絵画、工芸、ファッション、音楽、文学、食物なども含めて、人間は美に囲まれている必要があったのでしょうか。その中で、ジュエリーは人類の歴史以来5,000年、少なくとも18世紀ぐらいまでは財宝としても美術品としても頂点にあった。それが今のように貶められてしまった契機となったのは、19世紀の産業革命以降の大量生産と大量消費時代の到来のころからなんです。

本誌 手に入りにくかった宝石が手ごろになった。価格が下がったのか、それとも供給が増えたのでしょうか。

有川 両方ですね。300年ほど前まではインドでしか産出されなかったダイヤモンドが18世紀にブラジルで、19世

紀に南アフリカで、そして今では世界中で大量に産出されるようになった。それと、現在の大きな問題点ですが、宝石の見た目を改良する加工技術が発達して、本来は価値の低い宝石でも商品になるようになったことです。たとえば今世の中に出回っているルビーの多くは、本来は品質の低い黒っぽい原石を、熱によって還元させ、酸化第二鉄を分離して元地の赤を浮き上がらせたものです。確かに見た目は赤いルビーになるのですが、やはり純粋な自然のものとは違うものです。他にも、エメラルドはオイルで処理したり、樹脂充填が行われたり、処理によって透明度を高めることが行われています。これには多くの人々が手軽に美しい宝石を楽しめるという長所はあるのですが、しかし、やはり、本当の自然の宝石には何か本質的な美の力があるような気がします。

本誌 価値の混乱がここでも起こっているのですね。

有川 そうですね。このことは今宝石にかかわる多くの人々が努力して、交通整理をしようとしています。そのことに期待したいと思います。

日本の文化の中のジュエリー

本誌 日本の文化の中でのジュエリーというのはどのようなものでしょうか？

有川 日本人はもともと高い文化レベルにあって、芸術を理解する素養にあふれています。たとえば、興福寺の北円堂にある無著像。私は慈悲というテーマをあれほどのリアリズムで表現した作品を他に知りません。百済観音の美しいフォルムなどまさに宇宙的で、人間が作ったとは到底思えないほどの造形です。あるいは、楽長次郎（桃山時代の陶工）や本阿弥光悦（安土桃山〜江戸初期の芸術家）の茶碗を見ると、造形も素晴らしし、色彩もマチエール（美術作品における材質的効果）も現代アートの巨匠であるマーク・ロスコ（抽象表現主義の芸術家）も敵わないくらいの究極の完成度です。さらには、江戸の町人文化が生み出した浮世絵、あれがなければモネの色彩も、ドガの構図も、ゴッホの存在感も生まれてないかもしれません。

本誌 日本人なら、ジュエリーの力をちゃんと受け止めることができるかと。

有川 そうですね。それと、これは逆説的なのですが、日本にはジュエリーの文化が歴史上長い間途絶えているんです。飛鳥時代や奈良時代には、日本人もちゃんとジュエリーを身につけ、ジュエリー文化を築いていたのに、平安時代になると、少なくとも表舞台からジュエリーは消えてしまった。

本誌 それはなぜでしょうか。

有川 絹の勝利だと思います。日本では美しい宝石はほとんど採れない。せいぜい糸魚川のヒスイや山梨の水晶やメノウでしょうか。それに対して十二単（じゅうにひと

え）や着物に代表されるように絹の文化が異常なくらい発達し、美しさにおいて圧倒的であったため、ジュエリーは櫛や笄（こうがい）など着物文化の付属品としてのみとなります。不思議なことに観音様などはティアラもネックレスもアームレットもバングルも、いつの時代も着けているのですけれど……。とにかく一時期、日本からジュエリー文化が消えてしまった。戻ったのは明治時代です。鎖国政策によって途絶していた外国の文化がどっと入ってきて、それとともにジュエリー文化も復活しました。鹿鳴館の時代ですね。だから、日本はジュエリー文化については、歴史的にはまだリハビリの段階にあるのかもしれない。

日本のジュエリー文化を取り戻すために

本誌 もう一度ジュエリー文化を取り戻すためには、どのような条件が必要になるのでしょうか。

有川 一にも二にも、本物に触れることが大切です。経済産業省がやっている「ジュエリーコーディネーター」という資格があって、その教科書の編纂をしている方と話したとき、「日本の職人たちの一番の嘆きは、日本ではいいジュエリーがあまり見られないことです」とおっしゃっていました。クリエーションというのは感動によって生み出されるものです。感動を喚起するものがなければ、優れた創造は生まれません。写真や映像でなら見ることはできるけれど、それではだめなんです。やっぱり本物をじかに見ないとその力が伝わりません。ですから、日本にジュエリー文化を創造するためには、本物をどれだけ持ってこられるか、そして、それを一人でも多くの日本人の人々が見ることが大切なのです。

本誌 有川さんがアンティークジュエリーの収集を始めた理由が、そこにあるわけですね。

有川 そうです。39歳のときに私は、今申し上げたような明確な結論に達し、コレクションのスピードをさらに加速しました。以降、20年近くかけて、自分自身が感動する美しいジュエリーを集め続けてきましたが、幸運だったのは、本当につい最近まで、ほとんどコンペティター（競争相手）がいないというぐらいの状態が続いたことで、世界中の逸品を比較的スムーズに集めることができたことです。明治時代に浮世絵が包装紙として海外に流出したように、本来石の文化の伝統を持つヨーロッパでも、ジュエリーはロストアートだったのです。ここ最近、ジュエリーをアートとして見直す流れが戻ってきて、すべてのものが高価になりつつありますけれども、それでもまだまだです。おかげで、貴重な文化遺産に相当する作品を数多く収集することができました。去年、一昨年、ブリュッセル（ベルギー）で行われた「ブリリアント・ヨーロッパ」という展覧会は、EUの統合が決まったローマ条約の50周年を記念して開

かれた展覧会でしたが、テーマが、オットー大帝（10世紀）の時代から20世紀初頭までの、「ヨーロッパの宮廷ジュエリーの歴史」だったんです。ということは、当然、ヨーロッパ中の名だたる美術館から所蔵品が貸し出されているわけですが、2番目の貸し手であるルーヴル美術館が12点、ドレスデン（ドイツ）が5点、フォルツハイムのジュエリー専門の美術館が8点、という中で、ヨーロッパではない日本の、それも一企業にすぎないアルピオンアートから貸し出した点数が28点で世界最大のレンダー（出品者）でした。

本誌 大変な功績ですね。今年フランス共和国から芸術文化勲章シュヴァリエが贈られたわけですが、日本人のジュエラーである有川さんに、なぜフランス政府が勲章を贈ったのでしょうか。特に重要なポイントは何だったんですか。

有川 授与式のとき参事官からいただいたお言葉は「有川さん、あなたは美の人です。ジュエリーの収集家であるというより、美の収集家です。フランス宝飾文化の日本への紹介と世界の宝飾文化への貢献に対してこの勲章を授与します」というものでした。「フランス文部省はずっと有川さんを見てきました」といわれたときは、フランスという国の文化に対する“本気”を感じました。少し後ですが、文化担当の方から「有川さんが集めてこられた作品をずっと注目して見てきました。そこには単なる商売というだけではなく、明確な文化創造の意図を感じました」とおっしゃっていただきました。フランス大使館には、私たちが参加した展覧会のカタログは特にお送りしていませんでしたので大変驚きました。

本誌 素晴らしい評価ですね。

有川 まさに、今までのつたない営みが報われたと思わず肩の力が抜けました。と同時に、たとえ外国人であっても、文化をちゃんと理解し、その保護育成のために力を尽くしている人を評価しようという、フランス人の懐の深さにも感動しました。

本誌 それにしても、よくこれだけ集められましたね。

有川 それは多くの方々の信じられないほどの協力があつたおかげです。それと私がそれだけ集められたということは、世界的な傾向として、ジュエリーに対する関心が危機的なほど薄れてしまっていたということでもあります。ブリュッセルの展覧会のオープニングセレモニーに出席したときに、その主席学芸員の方が私に語ってくれた「自分たちはこの展覧会を手がけるまで、ジュエリーがこれほどすごいものだというのを、全く知りませんでした」という言葉が大変印象的でした。ジュエリーを代々伝えてきたヨーロッパの人々にとってさえも、まさにロストアートだったわけです。

本誌 本物を見なくなったからですかね。中世までは、王侯貴族や司祭がジュエリーを身に着けて民衆の前に披露する機会があったわけですが、それは自分たちの存在を

誇示するためだけの意味ではなかった、というのが納得しやすい話ではあります。

有川 そうですね。本質に近づくためには、その存在と対座することがとても大事です。言葉では騙せます。でも、存在と対座したときに、偽れない世界があるんです。だから私の芸大での授業は、情報としては西洋宝飾史を言葉で伝えますけれども、大事なことは、作品そのものを見て触れて、感じとってもらうことなのです。そうして本物に触れることで、必ず彼らのクリエイションの源になる。美と感動こそが創造の因であり果であるわけですから。

本誌 普通それは、美術館とか国家レベルの取り組みでされることでしょうか。それを個人でされているところがすごいですね。

有川 最上を目指すことはとても重要なんですけど、でも、それは、理解されにくい世界でもあるんです。たとえば、宝石にしても、総合評価で90点のもの、95点のものは、わずか5点の差でも希少性が全然違うんです。90点のものが100個あるとすれば、95点は1個しかないというレベルです。ということは極端に言えば95点のものは、90点のものに対して、本来なら100倍の値がついてもおかしくありません。100倍は大げさにしても、私たちは、その5%のクオリティの差に対して、3倍、5倍といったお金を出して手に入れることが実際にあります。でも、お客様との取引では、品質で5%の違いは、値段にはなかなか反映できないのです。

本誌 私たちの苦悩もまさにそこです。本質的価値が値段に反映されない。これが資本主義原理の最大の欠点かもしれません。本質至上主義ではなく、需給バランスだけで価値が決定されてしまい、本当に質の良いものが不当に低く価値判断される。このギャップに、私たちも苦しむんです。

有川 資本主義の論理で動いている以上、そこを離れるわけにも無視するわけにもいきません。会社を成長させ、社員にも取引先にもちゃんと貢献できなければ、存在そのものが不可能となる。それは、本質とはずれていることのように感じるけれども、でも、その営みなくして、私たちの理想とするゴールの達成もあり得ない。しかし、その理想を言えば、存在価値も失われたぶん推進力も失うでしょうね。

本誌 それこそ、神様が、自分に「その仕事をやれ」と言っているぐらいの強い思いが必要なんじゃないかな。

有川 実際、そう思うときもあります。本当に、私が収集を始めたときは、不思議なほどほとんどの人がジュエリーをアートとしては見ていませんでした。当然ながら一般的な宝石商の主なテーマは、ジュエリーを仕入れて売り、いかに利益を確保するかということです。だから、貴重な品であることはわかっているけど、普段は利用のしようもないティアラや、大きすぎて使えないジュエリーは商品にならない。大げさに言うと、美術店の隅に埃をかぶって転がっていた



図3 ヘラクレス・インタリオ・リング (1780～1784年頃)
(アルビオンアート・コレクション)

ような状態でした。だからこそ、本来ならヨーロッパ各都市の中心的美術館に並んでいてもおかしくない貴重な作品を、かなりの点数、短期間で集めることができたわけです。世界が本質的な価値を見失っていたわけですね。ジュエリーが、これほど価値があるものであることを、誰も気づいてなかったんです。どれほど美しいか、いかなる本質を持っているかではなく、どれだけ相場として価値があるかしか見ていなかった。これは大変もったいないことでした。

本誌 日本だけではなく、世界中で本質的な価値との間にずれが起こっていたわけですね。

有川 本来なら間違いなく美術館に所蔵されるはずのものが、信じられないほどの価格で手に入ることも多々ありました。純粹に、自分で美を見だし、感動したものを、心が震えたものを集めていったら、世界が驚くようなコレクションになりました。

本誌 最後に何か、皆さんへのメッセージをお願いしますか。

有川 “目を養う”ということについて一言、私見をお伝えしたいと思います。このことには二つのポイントがあります。一つは可能な限り質の高い美に触れることです。これは分野は問いません。日本には世界的にもとび抜けて素晴らしい美がたくさんあります。今回の私どものコレクションの中では、マーチャントのヘラクレスのインタリオ(図3)は機会があればぜひご覧になられてください。“宝石彫刻師のレオナルド・ダ・ヴィンチ”だと私が思っている作家のようですが、ライオンと戦って殺した後のヘラクレスの姿が奇跡のような完成度で彫り上げられています。



図4 ハノーヴァー・ティアラ (1830年頃)
(アルビオンアート・コレクション)



図5 カルティエ バード&ツリー・ブローチ (1935年頃)
(個人蔵 (協力: アルビオンアート))

血管まで正確に表現されていますが、なによりも1mm以下のスペースにヘラクレスの限りない深い眼差しが完璧に彫られています。沈み彫りのインタリオはイマジネーションでしか彫れないことを考えると、もはやこれはどうやって彫ったのか理解不可能な美の世界です。もう一つは、芸術に相對するとき、自分の感受性を一番大切にすることです。自分の心が震えるかどうか、好きかどうか、それが一番大切なのです。

最後にマイケル・ジャクソンのスリラーをプロデュースしたクインシー・ジョーンズの言葉を皆様へ贈ります。誰かが曲の選択を決定する基準を尋ねると、彼は静かにこう答えたそうです。「私自身の背骨が震えるかどうかだ」

長生きすれば良いことがある

—「サブちゃんの十大習慣健康法」スコア・カレンダーをつけよう—

昇地 三郎(しいのみ学園理事長・園長)

中原 悦夫

島 史雄(福岡貝塚病院特別顧問)

(日本アンチエイジング
歯科学会編集委員長)

松股 孝(済生会八幡総合病院院長)

●昇地三郎博士・103歳・誕生日晩餐会にて



(左：昇地先生，右：中原)

中原 昇地三郎先生は、今年103歳です。2005年以来連続4年、「誕生日」を海外で過ごしてこられました。

今年是世界一周を年末に伸ばし、久しぶりに日本で誕生日を迎えられました。8月16日の誕生日には、親しいご友人で主治医の島 史雄先生(福岡貝塚病院特別顧問・脳神経外科)、松股 孝先生(済生会八幡総合病院院長・消化器外科)、博士のSP役を務める坪根ちかこさんらが昇地三郎博士を囲んでの誕生日会となりました。談笑の中で「長寿の秘訣」や「これから進む高齢化社会の新しい在り方」を語り合っていました。

会場は、昇地三郎先生が応接間代わりに利用しているメゾンドヨシダ桜坂(福岡市)です。



103歳の誕生日、シャンパンで乾杯！
(左から松股 孝先生、昇地三郎博士、島 史雄先生、坪根ちかこさん)

Saburou Syouchi

- 1906年北海道釧路生まれ。岩国中学・広島師範学校・広島高等師範学校・広島文理科大学卒業。九州大学医学部専修科修了。医学博士・文学博士。(父君は山口県上関祝島出身の陸軍将校。日露戦争で二百三高地攻略に従軍)。
- 福岡教育大学教授・名誉教授(韓国・大邱大学/中国・長春大学・華東師範大学/ロシア・モスクワ市立心理教育大学名誉教授)。知的障害児の学校「しいのみ学園」を創立(1954年)。現在：社会福祉法人しいのみ学園理事長・園長。三才児教育学会会長。
- 【著 書】「百三歳児・しいのみ学園」(55年前の復刻版)「手作りおもちゃ親子愛情教室」
- 【ブ ロ グ】<http://blogs.yahoo.co.jp/shiinomi100> E-mail: shiinomi100@yahoo.co.jp

Fumio Shima

- 1941年兵庫県淡路島生まれ。1967年九州大学医学部卒業。日本脳神経外科専門医。1978～79年ドイツ・マックスプランク脳研究所客員研究員。1992年九州大学医学部助教授。1993年米国ロマリダ大学客員教授。日本定位・機能神経外科学会会長。2001年福岡貝塚病院機能神経外科主幹。
- 【専 門】パーキンソン病の薬物およびDBS治療。ジストニアなど各種不随意運動のDBS。ボトックス療法。いたみに対する脊髄刺激療法。側頭葉てんかん外科。
- 【役 職】日本定位・機能神経外科学会名誉会員。九州・山口機能神経外科セミナー事務局代表。九州・山口てんかん外科研究会世話人。

Takashi Matsumata

- 1951年北九州市小倉生まれ。1978年九州大学医学部卒業後、同第二外科教室入局。肝臓外科の臨床と研究に従事。済生会八幡総合病院外科主任部長。同病院副院長。2000年4月国立中津病院院長。7月より中津市立中津市民病院院長。2007年より済生会八幡総合病院副院長。2009年より同病院院長。
- 【所属学会】日本外科学会(指導医)、日本消化器外科学会(指導医、評議員：1996年～現在)、日本肝胆脾外科学会(評議員：1996年～現在)、日本臨床外科学会、日本緩和医療学会、日本補完代替医療学会、日本うつ病学会、日本咀嚼学会、廃棄物資源循環学会、日本鉄バイオサイエンス学会。
- 【資 格】日本医師会認定産業医、日本医師会認定健康スポーツ医、日本医師会医療安全推進者、感染制御医師(ICD)

しっかり噛んで食べる

中原 103歳の誕生日、誠にありがとうございます。何はさておきシャンパンで乾杯の後は、鼻地先生に一言お願いします。

鼻地 今日は真夏というのに秋のように清々しい一日でしたね。私の心も爽やかです。お忙しいお二人の名医と一緒にできたことを大変喜んでます。島先生にはお嬢様、松股先生には奥様をご同伴いただき、席が明るくなりました。みなさま、ありがとうございます。私の誕生日は8月16日です。この日は、私の生涯にとって大変意味のある日です。生誕地は北海道の釧路です。

中原 103歳の誕生日会に同席しての感想はいかがですか？

島 鼻地先生は、いつお逢いしても笑顔が素晴らしい。私は、日頃パーキンソン病の患者さんと接することが多いのですが、先生の笑顔をいつも思い浮かべながら、患者さんにどのようにアドバイスすれば笑顔が生まれるのかを考えています。私は鼻地先生よりも35歳も若いのですから、自分自身にとっても、医師としての仕事のうえでも学ばせてもらうことばかりです。

島祐子 先生のお元気の秘密は想像が付きません。元気の秘密も伺いたいのですが、素敵なレストランで誕生日会があると父から聞いて、お花をお届けする役目にかこつけてついてきました。

松股 この10年、毎年、お誕生日に同席してきましたが、鼻地先生は年を追うごとにむしろお元気になられている様子に驚いています。

松股弘子 鼻地先生は、先日サントリーホールで燕尾服を着て歌われたそうですね。今日は、お祝いに蝶ネクタイとカマーバンドをお持ちしました。

坪根 今年も8月14日から5年連続の世界一周講演旅行

の手配をしたのですが、新型インフルエンザの流行で急遽見合わせました。そのために誕生日を、5年ぶりにこうして福岡で過ごすことになりました。

中原 今日はオーナーシェフの吉田安政さんがいろいろと心配りをした料理が出てきました。新潟の天然牡蠣、松股先生の家庭菜園の手作り野菜、岩手の前沢牛等々、鼻地先生は、他の皆さんと同様、いかにも美味しく食べられましたね。

鼻地 私は、美味しいものしか食べない。それをしっかり噛んで食べます。

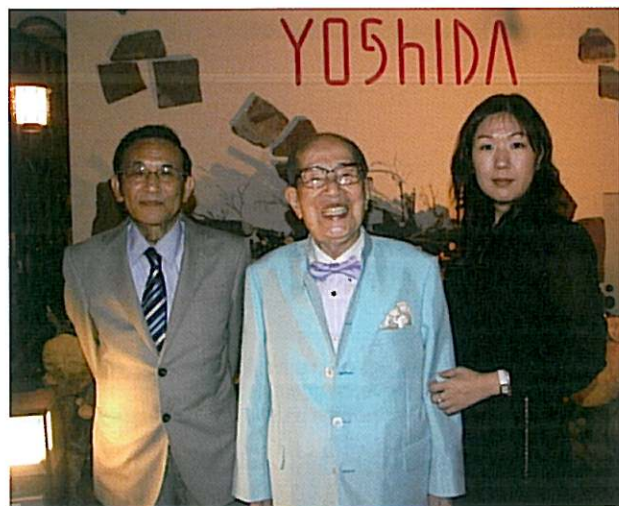
「食は命なり」。良く噛めば、素材の美味しさに到達します。多くの人は、調味料に騙されています。一流のお店は味が自慢だけではない。素材も含めて賞味してあげないと、シェフに申し訳ない。

私は、母親から30回よく噛むことを躰けられた。その習慣は今でも体に染み付いていて、母の教えを百年間も守ってきたことになります。

私は、15歳までは虚弱児だったのです。それは、私の誕生日と大いに関係があるのです。8月に生まれた私は生後6カ月目、つまり釧路の厳冬の2月、母親のお乳が出なくなりました。父が釧路部隊の将校でしたから当番兵が近くの農場から牛乳を調達してきました。その牛乳の煮沸(殺菌)が足りなかったのでしょうか、私は、下痢症状を起こし死線を彷徨い、命を取り留めたものの、以後長い間病弱・虚弱児だったのです。

松股 鼻地三郎博士の咀嚼習慣は、大変「理に適った生活習慣」ですね。私は消化器外科が専門ですが、胃がんの手術をした患者さんの予後をよくするには、咀嚼の指導が大切なのです。そのために咀嚼計を計測メーカーに依頼して作り、患者教育に使ってきました。

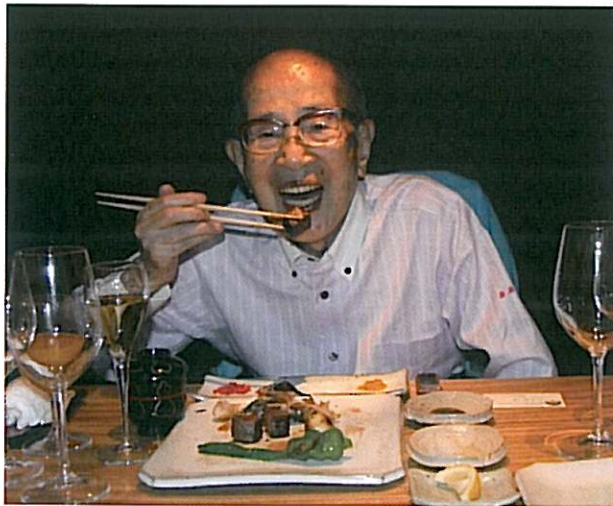
島 咀嚼すると脳機能にも良い影響を与えます。



鼻地先生を囲んで
(左：島 史雄先生、右：お嬢様の島 祐子さん)



鼻地先生を囲んで
(右：松股 孝先生、左：奥様の松股弘子さん)



ステーキも一人前しっかり完食

私は、2004年にNHKスペシャル番組「老化に挑む」の制作に協力して脳MRIをとりました。また、昨年末にも脳検査をしましたが、鼻地三郎博士の脳は、30歳以上若い、70歳代の脳です。

中原 良く噛むことの効用はいろいろあるようですが？

松股 満腹中枢を刺激するために少食になります。少食（低カロリー）は、老化を遅らせ、長寿になる医学データがたくさんあります。少食であれば、余分なホルモンやエネルギーを使わないですみます。毒物の摂取も少ない。免疫力が高まることも知られていますね。

鼻地 私がもし、両親の里（父は山口、母は広島）で生まれていたら、母乳が出なくなることもなく、したがって牛乳中毒から虚弱児になることもなかったでしょうから、30回噛む習慣も身に付かなかったでしょう。そうした意味で、釧路で生まれことを運命の出生だと思っています。

中原 鼻地先生は、咀嚼、食べることを楽しんでいらっしゃいますが、75歳から総義歯なのです。地元の開業医・菅野明先生と技工士・原田庸人（つねと）氏のケアで28年間何不自由なく咀嚼習慣を維持しています。このことは、われわれにこれからの歯科医療のあり方を考えるうえで貴重な事例でしょう。（総義歯医療については中原悦夫による部会からの提言に記述があります）

スペイン風邪の思い出

松股 鼻地三郎博士は、薬はどれくらい飲まれますか？使われていますか？

鼻地 ほとんど使ったことがありません。風邪を引いても、1週間くらい安静に寝て治してきました。私は熱に強いのかもかもしれませんが、解熱剤や抗生物質を飲むこともありません。1918年（大正7年）から19年にかけてスペイン風邪が大流行したことをよく覚えています。父が親しくして

いる医師がいました。その医師がスペイン風邪にかかり往診してくれませんでしたから、この時も薬を飲んでいないと思います。医師が往診もできなくなったと聞いて、子ども心にもスペイン風邪の恐ろしさに戦慄したものです。

罹患した人が戸板に乗せられて避病院に行く様子、避病院の横が火葬場になったこと、休校が解けて登校すると同級生が何人も亡くなっていました。

私の家族も親子5人が、一時は全員寝込みました。黒いマスクを買ってもらったことと、母親が氷を買ってきて氷嚢・氷枕を頻繁に取り代えながら、夜通し付きっきりで看病してくれましたことを今でも思い出します。

去年、世界一周の途中、中指を車のドアに挟んで骨折しましたが、痛み止めも飲まずにじっと我慢しました。骨折した後20日間以上、病院にも行かずに旅を続け、予定の講演をすべてこなして予定どおり帰国しました。

松股 薬のような化学物質を安易に使わないことが大切ですね。

鼻地先生の24時間

中原 SPの坪根さんは、先生の24時間、365日の様子をすべてご存知と聞きましたが？

坪根 鼻地先生の日々の暮らしは、平々凡々です。特別変わったことはない。スポーツジムにも行かないし、万歩計も着けていない。こだわりの食べ物もサプリメントもない。毎日を淡々と暮らしています。しかし、淡々とした暮らしが、よく考えると実に合理的で、長寿の秘密が隠されていると思っています。

鼻地 日課をご紹介しますと……起床は、夏は6時、冬は7時。朝起きたらすぐ風呂場で冷水摩擦をします。洗面の後、毎日カミソリで髭を剃ります。洗濯した下着に着替え、自分で考案した棒体操を5分間します。剣道二段の私は、棒の使い方に剣道の型を取り入れています。気合を入れて棒を振り、30cmほどの棒を背中に回したり、股を潜らせたり、膝を引き上げたりしながら体のいろいろな部分の関節の動きを整えます。こうした体のアイドリングをすることで、体の柔軟性を保つことができます。わが家には、バリアフリーのために改修した箇所は1カ所ありません。家から学園に行く道は、18個の飛び石と石を埋め込んだ石畳を歩きます。躓いたり、転んだり、体のバランスを崩したことは一度もありません。

食事は、一口30回噛む。その後今は、8時15分からNHKラジオ中国語講座を聞いています。15分間です。時間を見つけては、小さな紙に書き付けた単語や熟語を見ながら復習もします。食事の前後には、新聞4紙に目を通します。ニュースの時間には、世間の出来事に目を留めます。甲子園の野球や大相撲にも関心があります。

そして8時50分には、しいのみ学園に出勤して、毎日16名の職員を前に、5分間の訓話をします。同じことを繰り返せば、職員から「うちの園長はボケが始まったな」と喜ばれますから、気が抜けません。

こうした私の日課をわかりやすくまとめたのが、「サブちゃんの十大習慣健康法」です。10の項目には、「まず笑顔・ユーモア」に心がけること、「人々への感謝の心をもつ・その日の予定を確かめる為の祈りの時間、腰を伸ばして、足取りを軽くする為に固いマットに寝ること……」等々、元気を維持する生活習慣を列挙しました。

この10の項目を少しでも多くの方が、習慣健康法として実践していただくために、ポーリングのスコア・カードを模範にしたカレンダーを工夫しました。

坪根 昇地先生は今年、福岡県の後期高齢者のマスコット・ボーイに任ぜられたのです。66市町村で講演をします。その時に提唱するのが、「サブちゃんの十大習慣健康法・スコア・カレンダー」です。

「サブちゃんの十大習慣健康法」

中原 昇地先生の日常の生活習慣を島先生は、脳神経外科の立場でどのように評価されますか？

島 脳は、人間が生きるために必要な情報を集め、分析し、さまざまな指令を出しています。たくさん脳細胞が連携プレーをしてこそ、活動的に、笑顔で生きることができるよう。昇地先生の習慣は、実に巧みに脳をトレーニングしています。

十大習慣健康法を拝見すると、利点が大きく3つに分類できます。

1つは、ユーモア・笑顔を絶やさない習慣を持ち続けています。気分が明るく、前向きになる、人の輪に溶け込むことなど精神的な安定・心の安らぎを持ち続けることが長

寿の秘訣ですね。私は、パーキンソン病の患者さんのケアをしていますが、患者さんの笑いを誘うのに大変苦労しています。心の開放感を呼び起こすために、お孫さんと一緒に来てもらったり、カラオケに誘ったりしていますが、笑顔を絶やさない習慣を身に付けることは大切なことです。

2つ目は、昇地先生の習慣には、リズムカルな運動を続けるプログラムがいくつも含まれています。年を取るとリズムカルな歩行や運動ができない。棒体操は脚力や腕の屈伸だけでなく、指先の細かな動きにも気配りがされています。リズムカルな運動を維持するには、脳細胞のいろいろな分野がネットワークを作って初めて可能なのですが、冷水摩擦やカミソリを使っての髭剃り、棒体操は、脳細胞のネットワークがフル回転しますね。

3つ目は、記憶力の維持です。老化・加齢の指標になるのが物忘れです。時系列が混乱するのも加齢現象の一つです。認知症に悩む話が聞かれますが、これは海馬が萎縮すると起こります。昇地先生は、よく新聞を読まれる。ラジオ講座で語学を勉強する。こうしたことは、脳を活性化しているのです。脳MRI写真を見ると昇地先生の海馬は衰えがみられません。

昇地先生の十大習慣健康法は、人間が若々しく生きるための要件を実に巧みに取り入れています。

一口30回噛むことは、誰にでもできる。お金も掛けずにできる。やるかやらないかは、本人の心がけ次第です。「継続は力なり」と書かれています。スコア・カレンダーに日々の暮らしを記録していけば、知らず知らずに健康な生活習慣を身に付けることになるでしょう。

新年はアメリカで…

中原 先日沖縄で開かれた講演会に、アメリカ・ジョージア大学老年学研究所のPoon博士がわざわざカメラマンを

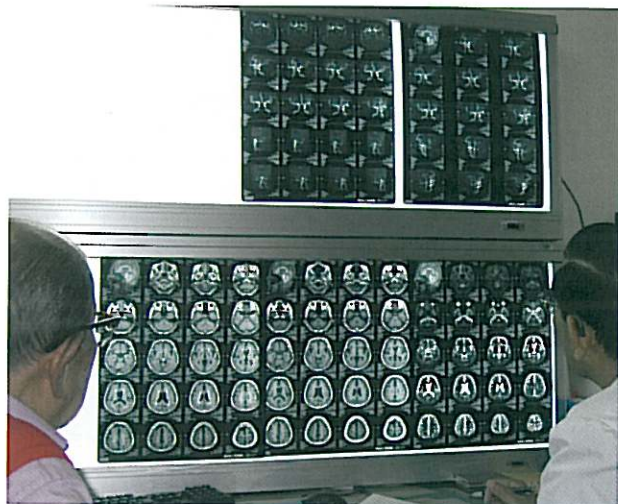


103歳を記念するバースデーケーキ



祝福するオーナーとともに

(左：オーナーシェフの吉田安政さん、右：坪根ちかこさん)



鼻地先生の脳 MRI を診断する島先生 (右)



島先生の診断「鼻地先生には 70 歳以上の人に見られる脳内異変が見当たりません。白質部が綺麗で、記憶や学習を司る海馬の萎縮が少なく、また、脳の反応速度は 30 代です」。

同行して聴講されたと伺いましたが、

鼻地 「鼻地三郎博士の今の生甲斐は何でしょうか？」の質問に「人を驚かせることです」と即答しました。

島 人を驚かせるためには、脳をフル回転することになります。

松股 「人を驚かせることです」一鼻地先生の当意即妙な真理を突いた答えに驚きますね。

坪根 Poon 博士は、鼻地先生と二日間、同じホテルで過ごしました。講演のあと 800 名の聴衆を前に、「鼻地三郎博士は、人間のパイオニア・人類の宝です。皆さん、鼻地三郎博士の生活習慣を学びましょう」と訴えました。

アメリカ・ボストン大学の Perls 博士も、鼻地先生の大ファンです。「鼻地三郎博士は、ジョークがうまい。ユーモアがある」。元気で長寿な人の共通点は「ユーモア」であると話されたのは Perls 博士でした。その Perls 博士が、「2,000 名以上元気な 100 歳を見てきましたが、こんなに行動的な百寿者は初めてです」と鼻地先生に「世界一」の折り紙をつけ、褒めて帰りました。

中原 Poon 博士は、鼻地先生の写真集「百二歳児」の英文解説を見て、「これだけ世界中を駆け巡って活躍するからには、よほど良いサポーターがいるにちがいない……」「どのようなサポートをしているのか知りたい」と沖縄の講演会主催者に問いかけがあったと聞きましたか？

松股 坪根さんの役割が大きい。

坪根 「いつも先生の横にいるあの女性は誰か？」という人います。鼻地先生の活動を紹介するブログや、昨年発行した「百二歳児」に私が先生と一緒にいる写真がたくさん載っているからです。こうした方に「私は鼻地三郎博士の SP です」とお答えしてきた。100 歳を越えたお人好しの教育学者には、SP (セキュリティ・ポ

リス: security police. 要人警護警官) が必要なのです。

ピラニヤ役も自認しています。

鼻地 人生は戦いなり。敵がいなくなればたちどころに生氣が失せます。

中原 今年の世界一周はいかがされますか？

鼻地 12 月にアメリカにわたり、新年のカウントダウンは、Poon 博士の住むジョージア州アトランタ市で迎える計画です。あそこは、CNN テレビ局の本拠地です。CNN スタジオからの新年のご挨拶ができるようにしたいですね。

中原 これまでは、医療や介護の充実が叫ばれてきましたが、鼻地先生の暮らしぶりは、これからの高齢化社会のあり方にたくさんの示唆を与えています。

先日厚生労働省は、100 歳人口が 4 万人を超えたと発表しました。100 歳以上でも元気な人が続々と登場する「100 歳時代」に突入したのです。これからの百寿者は、人生のお手本なのです。

鼻地先生が提起された「サブちゃんの十大習慣健康法」は、個々人の日常生活・生き方を、規則的・リズムカルな暮らしに刷新します。しかも、特別な設備も無用です。実に安上がりなプログラムです。これまでの医学・歯学・社会福祉学の専門家が思いつかなかった新しい提案です。

高齢化は老化と同義語ではない。生きる意欲や生きる知恵はいくつになっても清新であり続けることができるのです。

日本歯科医師会は、8020 運動を通じて、健康な社会づくりに貢献してきましたが、今日のお話を通じて、百三歳でもなお「児」を自称される鼻地先生の提言に学ぶことがたくさんあることがわかりました。

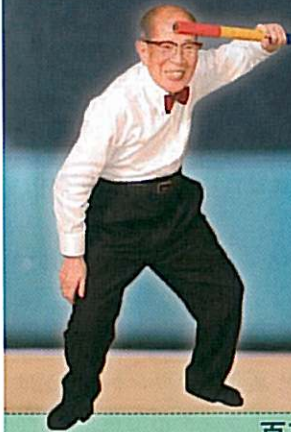
今日は皆さん、どうもありがとうございました。

今からでも遅くはない・・・前進せよ

継続は力なり

サブちゃんの十大習慣健康法

脳は良く生い茂った樹木のような構造です。樹木の枝に当たる・・・脳神経細胞は使い続けられれば、幾つになっても成長し続けます。10項目を続けて行えば、脳の色々な部位を刺激し活性化します。



あなたの健康を応援しています

百三歳児・鼻地三郎博士 元気の秘訣は何! 健康増進のための スコアア・カレンダー

あなたの脳がフル回転
最新の脳トレ日記です!

お名前 (かな)

住所: 〒

生年月日(歳)

電話・メール

2010	日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	点数計	
月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	曜日																					
サブちゃんの十大習慣健康法	例																																	
1) 先ず笑顔・ユーモア(長寿者の共通点)	▲																																	
2) 冷水摩擦(歯を磨く・髪そり・着替える)	●																																	
3) 棒体操(関節運動・バランス・瞬発力)	●																																	
4) 祈る(感謝の心・願い事)	▲																																	
5) 一口30回噛む(少食・免疫力)	●																																	
6) NHK 語学講座を聞く(一日一知)	●																																	
7) 新聞を読む(世事に通じる)	▲																																	
8) 口八丁(おしゃべりする・人の輪に入る)	X																																	
9) 日記を書く(手書きする)	▲																																	
10) 上を向いて寝る(背骨・腰を伸ばす)	▲																																	
マイプラン(自分で決めた習慣)																																		
11) 散歩																																		
12) 習い事																																		
13) 買い物																																		
合計点数	6.5																																	
+1) NHK百歳ハンバイ視聴(達人に学ぶ)																																		

記入方法: ● 全部出来た1点 ▲ 半分できた0.5点 X 0点

著作: 三才児教育学会・メール: shiinomi100@yahoo.co.jp

250点以上になったらコピーをFAXしましょう。毎月抽選で努力賞が当たります。応募先 FAX: 092-591-1531

サブちゃんの十大習慣健康カレンダー

“総義歯医療”の重要性

—総義歯が支える長寿—

東京都開業
中原悦夫

1 はじめに

今年になって“総義歯医療”という歯科界では聞きなれない表現を目にしました。それは3月に外添要一厚生労働大臣に宛てた「医療と介護費用を減らすための習慣健康法」という一通の提言書です(図1)。提言者は103歳にして現役の教育者であり「しいのみ学園」経営者である鼻地三郎先生。ご自身の健康の秘訣は一口30回嚙むことができる総義歯を手に入れたからに他ならないと断言し、98歳を過ぎてから世界一周講演旅行を連続4年成し遂げた経験に基づいた健康法で、来年には5回目の世界講演旅行を計画しているという前向きな生き方、ちょっとした毎日のご自身に課した習慣を紹介しています。もっとも、昨今の医療界で問われるEBMは示されていませんが「健康法に王道はありません。要は平凡な生活習慣を継続することです」とばっさり切り捨てるところからその提言は始まっています。鼻地先生は福岡教育大学名誉教授で心理学専攻の文学博士ですが、医学博士ももち合わせていて、その論文テーマはなんと「歯牙年齢と身体・精神の発達」でした。朝鮮動乱のとき、多くの年齢もわからない児童難民が福岡に上陸したとき、身体的特徴と精神的発育レベルを調べ、歯牙萌出状態によって年齢を推定することに活かされたく、法医学としても先駆的な研究です。ちなみに、文学博士・医学博士の両方をもち合わせるのは森鷗外と鼻地先生の2人だけという逸話の持ち主です。

いずれにしても103歳の一般人の“総義歯医療”という言葉に託された意義は大きく、医療人として真摯に受け止めながら考察していきたいと思います。

2 生命形態の発生にみる情動表現と総義歯

これまで総義歯学は歯科医療に限定された学問であ

り、身体全体を扱う医師の範疇にはない学問でした。また、総義歯を扱ってきた歯科医師にとっても、その総義歯が直接寿命に関係するという概念を抱きながら総義歯製作にあたることはまれであったはずですが、しかし、抗加齢に医学が及んだとき、抗加齢医療の原点は生命活動の基本である“食”と“性”に立ち戻り、口腔領域の生命における重要性を改めて認識させられることになりました。

口は解剖学的には頭部にある消化器の一部であり、生命活動をするうえで最も重要な摂食活動の入り口です。口唇と歯と舌が中心になって口腔前庭と固有口腔を構成しています。また、口裂の周囲に向かって多くの表情筋が集中し、顔の表情は口を中心に構成されています。

この表情筋を支配している脳神経の顔面神経、迷走神経をはじめ、三叉神経、舌咽神経、副神経などに支配される諸筋群は鰓弓筋に由来していて頭腸に属しています。元来これらの神経は内臓運動性神経であり、哺乳類になってこれらの鰓弓筋が咽頭、口腔および顔面の横紋筋に変化したものです。これらの筋は真の横紋筋と異なり完全に随意的に動くというのではなく、情動による表情反応を作り出します。つまり表情・咀嚼・嚥下・発音に関わる諸筋群はすべて鰓弓筋に由来しているので、情動による表現と深く関わっているのです。

舌の筋肉だけは体壁性の筋肉に由来していますが、感覚は内臓系の由来であり、内臓感覚が体壁運動で支えられています。すなわち精神・思考活動は、副交感神経・錐体外路系のみで生きていた原始型時代の摂食・呼吸と、消化・生殖の基本体制を支える鰓腸系の筋肉の体壁運動系・錐体路系の機能が重層することにより、これらの筋群のリズム運動によって営まれているのです。

それゆえに、口を中心とした顔は内臓の前端露出部であり、内臓の感受性が、発語(言葉の形成)や、発声を中心とした声楽や、管楽器を中心とした音楽における表

舩添 要一 厚生労働大臣 殿

平成 21 年 3 月 23 日 (月)

「医療と介護費用を減らすための習慣健康法」について

百三歳児・教育学者 (福岡教育大学名誉教授) 舩地三郎
(しいのみ学園園長・理事長)

100 歳から連続 4 年世界一周講演旅行を成し遂げた人生経験を元に、国民の皆様が健康で文化的な生活を営む為、と同時に急増する医療費・介護費用を少しでも減らす為に、以下の事を提言いたします。

百三歳の提言： 5 つの習慣健康法

健康法に王道はありません。要は平凡な生活習慣を継続することです。

1. 一口 30 回噛む

咀嚼の励行 ー私は、一口 30 回噛む習慣を 100 年継続
小食になります。これこそ肥満防止・長寿の秘訣です。

※ 80 歳以上の老人の 46%は、歯がありません。

(8020 推進財団調査)

こうした人々は総義歯医療が必要です。

健康保険が認めている総義歯医療費は約 7 万円です。

これでは、よく噛める総義歯治療は不可能です。

(膝関節症：163 万円，大腿骨頭部骨折：145 万円)

(全日本病院協会調べ)

(私は 75 歳から総義歯です。私費で義歯を作りました)

総義歯医療費の早急な見直しが必要が必要です。

2. 硬いマットに寝る

腰が沈まないマットに寝れば背筋が伸びて、腰が曲がらない。
躓くことがなく寝たきり老人にならなくて済みます。

3. 寝汗を拭く

朝起きたら直ぐに濡れたタオルで全身を拭きます
この時下着を着替えれば気分爽快です。

4. 関節の動きを整える

舩地式・やる気体操は音が出る棒を振り回して行います。寝たきり老人や車椅子生活から自立
が可能です。

5. 先ず笑顔

笑顔を作ることもお金はかかりませんが福を呼びます。100 歳以上の元気老人の共通点はユーモア
です。

(アメリカ 100 歳研究所 パールズ博士)

図 1 提言書

現にも口は深く関わっています。

このような動的な表現においても静的な表現においても、口が関与する表現はすべて内臓の感受性すなわち心の現れとして生命活動における意味をもつこととなります。また食と性を営むのは内臓系で、感覚や運動にたずさわるのは体壁系です。生命体とは固体のリモデリングによるエイジングの克服であり、食と同様に口腔の機能は、腸管を介して生命にとって重要な生殖と直接結びついています¹⁻⁶⁾。

このように口腔領域は生命形態の発生に深く関わっていて、人間と身体のみならず、精神、とりわけ心の情動表現にも深く関わっています。総義歯による機能と審美の精密な再現は、単に口腔に偏在したものではないことが情動の面からもわかると思います。それゆえに、今後、総義歯学が歯科医療から医療としての位置づけに着目して考究する意義は大きいと思われます。

3 総義歯と抗加齢歯科医療

無歯顎患者になるととりあえずは総義歯対象者となり、有歯顎患者に比べると悲惨に思えるかもしれませんが、しかし、悪いことばかりではないのです。当然ながらカリエスリスクはなくなり、歯周病リスクもなくなります。同時に、それに伴う心疾患や糖尿病などの歯周病菌のもたらす全身疾患リスクも当然低くなり、また、有歯顎では扱いつらかった顎関節の位置のリセットや顔貌においても、特に咬合高径や口唇、頬筋との関係をコントロールするだけで自由に若返りをかもし出すことができるので、顔のアンチエイジング効果を最も即効で引き出すことができるのが総義歯です。

日本アンチエイジング歯科学会には12の部会がありますが、総義歯の人気は最下位です。予防歯科医療が浸透していけば高齢者を無歯顎にすることは少なくなり、総義歯学は無縫帯環や金箔充填法のように、過去の歯科医療となっていくかもしれません。しかし、総義歯学から応用して学べるものは、咬合力のコントロール、矯正時の歯列配列、そして顎顔面の審美性と多岐にわたり、そして無歯顎患者から学ぶことは非常に多いのです。にもかかわらず、将来を担う歯科医師の興味はもっぱら需要に即応できるインプラントであり、それに関連した最新医療機器です。私もその一人ですが、総義歯そして無歯顎患者から学んだことは、私の歯科医療の基礎を形成しています。インプラントにおける補綴と全身運動と関連する咬合関係、矯正のゴールとしての咬合、そして、歯周病治療計画とその予防にいたるまで、総義歯を学んでこそ得られたものが多々あるように思います。

80歳以上の後期高齢者のうち46%が無歯顎という報告があります。その方々の多くは、満足のいく総義歯を入れているわけではありません。20年もすれば、その割合は激減するかもしれません。それをただ待つのであれば、この国の政は単なる嫉捨山です。哺乳類は成長に要した時間の5～6倍が平均寿命だといわれています。人間の成長は顎関節の完成が24歳なので、生物学的寿命としては120～144歳という理論値が成り立ちます。“アンチエイジング歯科”を堂々と標榜したいなら、80歳の高齢者を、144歳は無理にしても100歳過ぎても心身ともに健康に生活させることが基本です。単に若返りといった容姿上の医療だけであってはなりません。まずは、すべての無歯顎患者全員に満足のいく総義歯を提供できるかが、抗加齢歯科医療としての最初の時限的課題ではないでしょうか。

4 歯周病治療後の総義歯とインプラント

歯周病やカリエスで痛むからといって、その歯を片っ端から抜いていったかつての歯科医師不足の時代、無歯顎患者の顎底は骨質、骨量ともに非常によく、総義歯を入れても安定しやすく、いわゆる“よく噛める総義歯”を作りやすいという現実がありました。その後、歯周病の治療の進化に伴って、拔牙が避けられるようになり歯牙の長期保存が可能になりましたが、一方で、歯槽骨が吸収した挙句の果ての拔牙が多くなると、その後の総義歯にとっては骨量、骨質ともに不利な条件になってしまい、やむなくインプラントに維持を求めていくしか方法がないといったケースが増えてきています。もっともインプラントにとっても、そのような条件下では不利であり、結局、“インプラントにとっても条件のいい歯槽骨は、総義歯にとっても維持安定のいい歯槽骨である”ということになります。

歯周病を完治させ、その後の予防が満足のいくレベルであればいいのですが、中途半端な歯周治療は、結局、インプラントにとっても総義歯にとっても不利な条件の歯槽骨になってしまいます。このように早期拔牙の有効性が一理あるのも事実です。

さらに、高齢者に対し、インプラントならびに補綴物装着後のメンテナンスに必要以上に比重をおいた設計の場合、自力でメンテナンスが十分に行えている間はいいのですが、それができなくなるととたんに歯槽骨が侵され、インプラントは脱離し、オーバーデンチャーは当然使用不能となり、残ったインプラントは残骸と化し、摘出手術を受けるすべもなく、食事のたびに対合顎底を傷つけて血だらけになっている、その後の高齢者の療養施設での光景を診療室では想像もしえないでしょう。

インプラントが絶対視されつつある昨今、改めて総義歯学を通して、歯科医療全体を再考すべき時期に来ているのではないのでしょうか。

5 “総義歯医療”と現行の医療制度

満足のいく総義歯を製作するには、熟練した診断と治療法を併せ持った歯科医師と、熟練した歯科技工士との共同作業であることは周知のとおりです。また、難易度は患者の歯槽骨の骨量および骨質に反比例します。適正な咬合ならびに顎底にフィットした安定した総義歯は、歯槽骨を長期にわたって骨量を保全してくれますが、不安定な総義歯は骨吸収を助長し、さらに顎底の条件を悪くしてしまいます。つまり、歯周病の中途半端な治療と同様に、不安定な総義歯も歯槽骨を侵してしまいます。

“保険で十分評価されていないのでやむをえない”で

は、医療人として失格です。かといって、ペイできないまま診療し続けて立ちいかなくなれば、医療自体成り立たなくなります。いずれにしても限られた予算のなかで、満足のいく総義歯を製作する義務が、歯科医師と歯科技工士に倫理的に課せられているわけです。

日本の医療政策は“福祉医療”の立場をとっていますが、歯科医療は医科と違って局長通達において一部混合診療が認められています。その意味するところは“医科に比べて歯科の保険点数は低く抑えられている代わりに、一部の補綴物に関して混合診療権が与えられている”ということです。したがって、日本の歯科医療は皆保険制度下において“福祉医療”の立場をとっていますが、一方でオプションによる選択肢を与えていることとなります。

一方、アメリカの医療政策は高齢者、障害者向けの「メディケア」と、低所得者向けの「メディケイド」という2つの公的社会保障プランは“福祉医療”ですが、その他の医療は民間保険に委ねているため“契約的医療”としての立場をとっています。いわゆる資本主義社会における医療政策です。

総義歯は口腔機能やその審美性の回復といった“回復的歯科医療”においては福祉医療そのものですが、アンチエイジングや全身の疾病予防など健康維持の意味合いを含んだ“創造的歯科医療”として位置づけるなら、純然たる福祉医療に大きな付加価値が加わることになります。その付加価値まで福祉として評価できるのでしょうか。

現行の日本の歯科医療は“福祉医療”と“契約的医療”の2本立て、つまり保険診療と自費診療の混合で提供されていますから“福祉的医療”といったところでしょう。患者に2つ以上の選択肢を与えていることで、国としては責任を果たしています。しかし、両者の自己負担額には大きな違いがあり、経済的事情により選択肢が限られる患者にとっては、保険内で総義歯を作るほかありません。しかも無歯顎患者の多くは高齢者です。いいかえれば、“福祉医療”と“福祉的医療”の狭間で、満足のいく総義歯を手に入れられない患者が存在するということです。

鼻地先生は医科の診療点数と総義歯を比較して、保険点数の評価の改善を求める嘆願書をも提出してくださっています。本来なら歯科医師の利害に関する嘆願書でもあるので、歯科に関連する団体から提出すべき内容の嘆願書を、患者としての立場で訴えてくださっているというのが着目すべき点です。経験的に口元の健康がいかに大切かといった歯科の重要性を理解され、満足のいく総義歯をすべての無歯顎者に提供することこそ、高齢者の医療費抑制につながるという訴えが一般人から提出さ

れ、さらに、そのためにも歯科医師ならびに歯科技工士に対し正当な評価が必要だということを訴えてくださっています。

口元の機能と審美の回復を歯科領域の範疇で総義歯作りをしてきたわれわれは、一般人の方が口元の健康は全身の健康につながり、長寿の要であることを経験的に理解しているということ、この嘆願書が政治や行政にどのように影響するかということよりも、深く受け止めなければならないのではないのでしょうか。そして一刻も早く総義歯学や歯科医学自体を発展させて、全身の健康医学との関連性を突き止めることでEBMを確立し、われわれはもう一度“総義歯医療”という言葉に込められた意味を、歯科医療の存在意義として再考する時期にさしかかっているのではないのでしょうか。

6 おわりに

8020運動の恩恵にあずかれず、無歯顎になってしまった総義歯を余儀なくされた高齢者は、今なお80歳代の半数近くにも及んでいます。一方では、100歳以上の人口は28,395人と2009年6月末で過去最高を更新し、高齢化の流れに拍車をかけています。今後はあらゆる福祉に国費がかさむので、同時に経済成長なくして満足のいく福祉医療は成り立たなくなります。これまでの歯科医療概念を超えて、われわれは健康長寿立国を目指す歯科医療を業としなければならないのではないのでしょうか。そのことに国民が気づいているということ、鼻地先生は、103歳を過ぎても税金を払い続けている現役の経営者として、われわれに語りかけてくださっているのだと思います。100歳過ぎても税金を取り続ける国であっていいのかという疑問は残るものの、心身ともにそして経済的にも健康な長寿を全うしていただくということは、経済成長の一助につながっていくのだということも、身をもって語っていただいています。

予防歯科が進歩し、ヘルスケアを実践している歯科医師や歯科衛生士、そして国民が増えてきています。8020運動も20余年の歳月を経て、地域差があるものようやくその成果が見えてきました。しかし人間の営みは時限です。特に高齢者には待ったなしです。一刻も早く“総義歯医療”の真意を国民に伝え、その付加価値を創生し、国民に提供することがわれわれの使命ではないのでしょうか。

最後に、もうひとつ、急がなければならない深刻な状況があります。若い歯科技工士の離職が深刻で、過去5年間の離職率は80%に達しています(図2)。歯科技工士の年齢分布は40～60歳に70%が集中していますので、このペースでいくとあっという間に歯科技工士も高

年	9年	10年	11年	12年	13年	小計
交付数	2,749	2,728	2,715	2,441	2,479	13,112
年	14年	15年	16年	17年	18年	小計
交付数	2,567	2,368	2,175	2,209	2,204	11,523

合計 24,635 人

平成 12 年度～平成 16 年度の免許交付数 12,030 名

平成 16 年度の 25 歳以下の就業歯科技工士 2,493 名

$(12,030 - 2,493) \div 12,030 = 79.3\%$

卒業 5 年後の離職率 約 80%

25 歳から 29 歳の離職率 74.9%

図 2 歯科技工士の免許交付数・離職率

齢化が進みます (図 3)。歯科医師の大切なパートナーである、総義歯を作る技術を伝授すべき後続の歯科技工士がいなくなるということです。

高齢者への啓蒙、国への働きかけ、そして歯科技工士の処遇改善など、クリアしなければならないことがたくさんあります。

“高齢化社会に一石を投じる大きな波を創り出す”このことが本会における活動に期待されているのではないのでしょうか。

また、日本アンチエイジング歯科学会デンチャー部会は、ただ単に総義歯学としての技術を考究するのではなく、高齢化社会と密接に関わる総義歯というオーラルリハビリテーションの付加価値を高め、その社会的貢献度を明確にすることにより、高度な技術の普及を促すことを根幹とした部会に育ってくれることを切に望むしだいです。

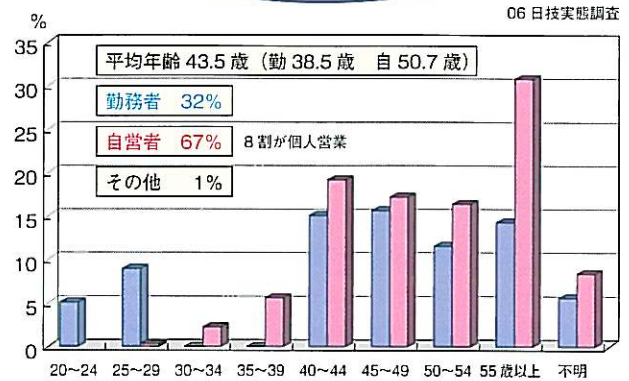
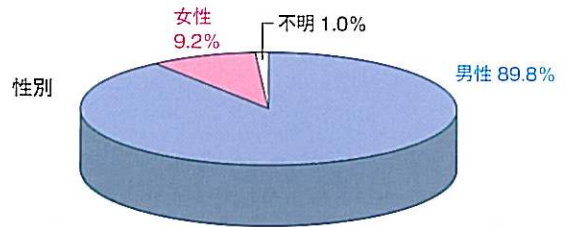


図 3 歯科技工士の年齢分布

文 献

- 1) 越智淳三訳：解剖学アトラス，文光堂，東京，1981.
- 2) 三木成夫：生命形態の自然誌 第一巻，うぶすな書院，東京，1989.
- 3) 三木成夫：生命形態学序説—根源形象とメタモルフォーゼ—，うぶすな書院，東京，1992.
- 4) 三木成夫：内臓のはたらきと子どものこころ，築地書館，東京，1982.
- 5) 西原克成：内臓が生み出す心，NHK ブックス，NHK，東京，2002.
- 6) 中原悦夫：口元の美しさ，高戸 毅ほか編，口と歯の時点，50-52，朝倉書店，東京，2008.

チェンジ！ その期待と躊躇い

オバマ大統領のスローガン「Change」(変革)と「Yes, we can.」(私たちはできる, やればできる)に始まった変革ムード。変えようとするアメリカ国民の強い意思の表れだったのか, そもそもアメリカ社会も変わらざるを得なかったのか, 対岸の日本も同じ民主党という政党が政権をとった。これもチェンジなのか?

“人間, 自分にとって都合のいいときは変化を望まないが, 不都合なときは変化を求める。”人間が人間である所以である。少なくとも今回も自民党の議員は変わりたくなかったであろうし民主党の議員は変わりたかった, いや, 変えたかったであろう。議員にとっては政権をとることが先決である。さて, マニフェスト片手の国民は果たしてどうなのであろうか?

若くて美しい年齢においてはその美貌の変化を好まない。加齢が加速したとき初めて何とかそのスピードを緩めたい, 元に戻したい, と若いころへの変化を求め始める。もっともそれは相対的变化だが。

みんなで老けるのはさほど怖いことではない。まあ, それなりに仕方がないと諦めの心がきいている。しかし, 自分だけ若々しく見られたり, あるいは逆に老けて見られたりすると心に動揺が起きる。同窓会がその審判の場になることが多い。もっぱら上辺だけで「○○ちゃんの変わんないねー」って言われて喜びつつも心の中では「自分は成長している!」と変化を噛み締めていたりする。卒業後の各々での活躍といった決定的な相対的变化という審判も興味を持ちつつそれを恐れるのも日本人ならではの気質であろうか。

アンチエイジングというスローガンと共にサプリメントだのアロマだの毛髪検査だの, これまでの抜歯, 修復・補綴といったいわゆる長年慣れ親しんできた回復型の医療に従事してきた私たちが, アンチエイジングという創造的な医療に従事することを望んでいるだろうか。本当に変わりたいと思っているであろうか。現状の歯科界は何かしなければならぬということに異論はないであろう。しかし自分の現状を変えたくない人にとってチェンジには犠牲が伴う。

民主党の政治を窺い見ている国民同様, 犠牲を避けたいと思う歯科医師は日本アンチエイジング歯科学会の動きを静観しているであろう。少なくとも, 本会の会員は変わるのを待つのではなく, 変えようという能動的歯科医師集団である。そして“学会誌は学会のマニフェスト?!”そんな思いで編集に臨んだ。

中原悦夫 記

日本アンチエイジング歯科学会誌 編集委員会

委員長 中原 悦夫
委員 永井 茂之
〃 小谷 善夫
〃 石田 恵子

● 日本アンチエイジング歯科学会誌
● Vol. 2
● 印刷 2009年12月20日
● 発行 2009年12月25日
● 発行者
● 日本アンチエイジング歯科学会
● 〒150-0044
● 東京都渋谷区円山町5-4
● フィールA渋谷201号
● Tel/Fax 03-3477-1085

● 制作者
● (財)口腔保健協会
● 〒170-0003
● 東京都豊島区駒込1-43-9
● Tel 03-3947-8894
● Fax 03-3947-8873
● 印刷所 壮光舎印刷株式会社